

希少な南国果樹・野菜をベースに 新商品開発や6次産業化を目指す

農業生産法人 有限会社 楽園おきなわ

代表取締役



あかみね ひでお
赤嶺 秀夫



「島らっきょうチップス」、「ジャンボグアバ茶」、「島やさいPOT」など自社栽培フルーツ、野菜を使ったオリジナル商品。ファーマーズマーケットや土産店で販売。

農業生産法人 有限会社 楽園おきなわ

■住所：沖縄県中城村奥間 786
■TEL・FAX：098-895-4388

新たな業種への参入

中城村の広大な農場で果樹・野菜の栽培管理を行う「農業生産法人 有限会社 楽園おきなわ」。代表取締役の赤嶺秀夫氏は、駐車場経営の傍ら受講した商工会の第2創業塾を機に、後継者を探していた農場の前経営者と出会い、農業への参入を決意。2005年に果樹園の経営を開始した。

楽園おきなわの事業内容は、主にさまざまな熱帯果樹の生産・販売。これに加え、最近では野菜などの加工も手がけている。

また、2011年には「合同会社かがやき（支援センターなつめ）」を立ち上げており、農業と並行して障がい者の雇用や自立支援にも取り組んでいる。

希少価値で独自性をアピール

同社で栽培する果樹のなかでも、いま注目を集めているのがナツメだ。ナツメは漢方薬の原料として知られるが、同社で栽培しているフルーツなつめ（沖縄なつめ）は台湾で生食用に品種改良されたもので、りんごや梨のような食感が特徴だ。成長が早く10月頃に花芽をつけ2～3月に収穫する。沖縄の気候に適した果樹だが県内での栽培は珍しく、豊富な栄養成分や花粉症予防効果なども注目され、インターネット販売を中心に順調に販路を広げている。他にも、世界一大きな果実といわれるジャックフルーツや、柔らかく甘みの強いシャカトウ、メキシコ原産のサボジラ、一般のグアバの3～6倍の大きさに育つジャンボグアバなど、多種多様な果樹を生産・販売している。

シャカトウは東南アジア出身者からの問い合わせ

せも多く、ジャックフルーツは東京など本土のレストランから注文が入るといふ。また、愛好家の多いソテツの中でも希少価値の高い黄金ソテツの販売も手掛け、同業他社との差別化に拍車をかける。それぞれ収穫量に限りはあるものの、需要の多さに手応えを感じているという。扱う商品の豊富さは、まさに同社の強みといえるだろう。このほか、最近着手した加工分野でも、自社栽培の島らっきょうを使ったチップスが優良県産品に選ばれるなど、多方面で業績を上げている。

今後の展望

今年度の事業計画として、同社ではクイモ栽培に重点を置いている。クイモは、しょうがに似た塊根をつけ、一般的にお茶として飲用される。

健康効果が高いものの市販のクイモ茶は苦みが強い。ところが、赤嶺氏が出会った中城村産のクイモは品種が異なり、苦みも少なかった。そこで、同社の主力商品化に向け開発に踏み切り、現在は加工法の確立や栽培の拡大を図っている。

また、6次産業化をふまえ、農園カフェの構想もある。健康指導を行うクリニックなどネットワークを活用し、農園の作物を使った健康食の提供や農業体験での運動不足解消など、目指すはズバリ「生活習慣病に打ち勝つ農園」だ。

「将来的には、冬に獲れるマンゴーの栽培など、独自性をさらに強める事業に挑戦していきたい」と意気込む赤嶺氏。これまでにない沖縄の画期的な産業スタイルとして、「楽園おきなわ」の今後の可能性に期待したい。